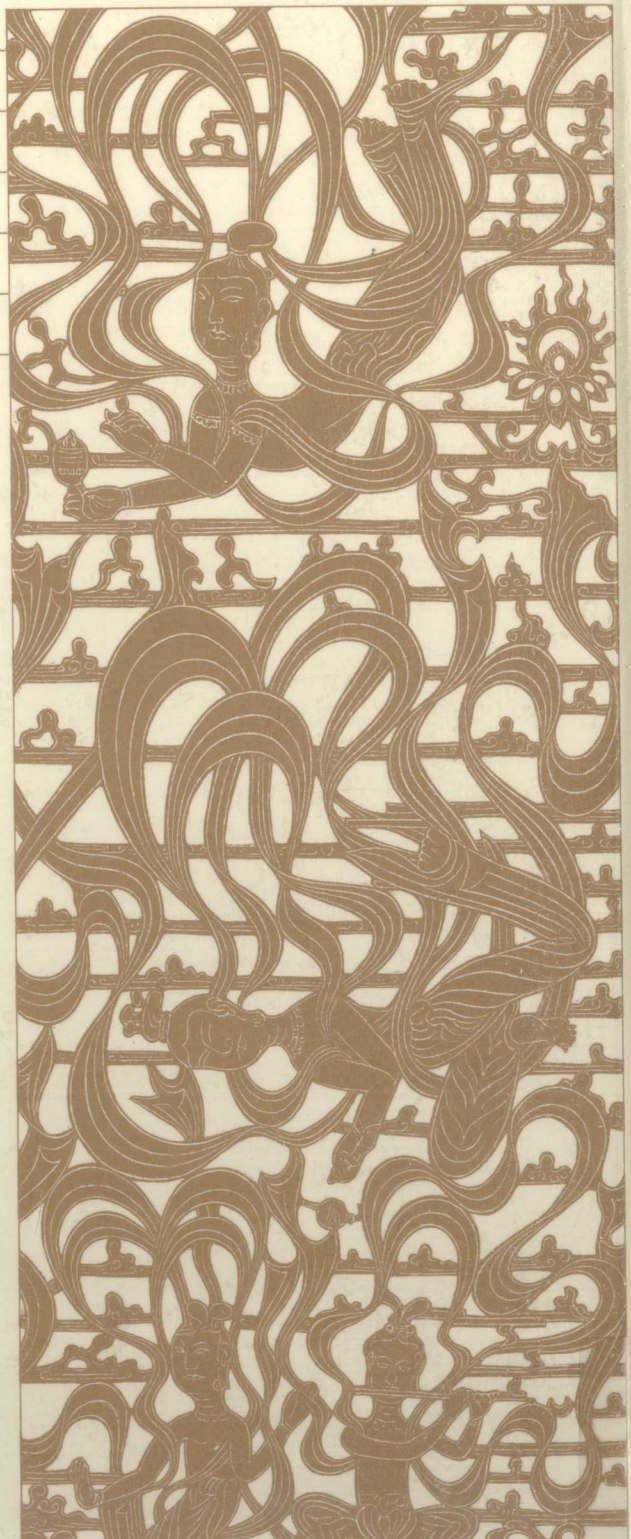
枕草子



223949

日文 701521974

枕草子

校注・訳
松尾聰　永井和子

日本財団文庫
笹川良一記念文庫
財団法人日本科学協会

新編
日本古典
文学全集

小学館

校注・訳者紹介

松尾　聰（まつお・さとし）
1907年、東京都生れ。東京大学卒。平安文学専攻。学習院大学名誉教授。主著『平安時代物語の研究―散佚物語四十六篇の形態復原に関する試論―』『全釈源氏物語一～六』『平安時代物語論考』ほか。1997年逝去。

永井　和子（ながい・かずこ）
1934年、東京都生れ。お茶の水女子大学卒。学習院大学大学院修了。平安文学専攻。学習院女子大学教授。主著『寝覚物語の研究（正・続）』『対訳日本古典新書・伊勢物語』『「源氏物語」と老い』ほか。

枕草子

新編日本古典文学全集　18

一九九七年一一月二〇日　第一版第一刷発行
一九九九年四月一日　第一版第二刷発行

校注・訳者――松尾　聰　永井和子
発行者――上野明雄
発行所――小学館
〒一〇一―八〇〇一
東京都千代田区一ツ橋二―三―一
電話　編集　〇三―三二三〇―五一四一
制作　〇三―三二三〇―五三三三
販売　〇三―三二三〇―五七三九
振替口座　〇〇一八〇―一―二〇〇
印刷所――図書印刷株式会社

©Y.Matsuo　K.Nagai　1997
Printed in Japan　ISBN4-09-658018-X

R〈日本複写権センター委託出版物〉
・本書の全部または一部を無断で複写（コピー）することは著作権法上での例外を除き禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（☎03-3401-2382）にご連絡ください。
・造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、乱丁、落丁などの不良品がありましたら、「制作部」あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

目次

古典への招待……一三
凡例……一九

一　春はあけぼの……二五
二　ころは……二六
三　正月一日は……二六
四　同じことなれども……三三
五　思はむ子を……三三
六　大進生昌が家に……三三
七　上に候ふ御猫は……三八
八　正月一日、三月三日は……四三
九　よろこび奏するこそ……四四
一〇　今内裏の東をば……四四
一一　山は……四五
一二　市は……四六
一三　峰は……四六
一四　原は……四六
一五　淵は……四七
一六　海は……四七
一七　みささぎは……四七
一八　わたりは……四八
一九　たちは……四八
二〇　家は……四八
二一　清涼殿の丑寅の隅の……四九
二二　生ひさきなく、まめやかに……五六

二三　すさまじきもの……五八
二四　たゆまるるもの……六三
二五　人にあなづらるるもの……六四
二六　にくきもの……六四
二七　心ときめきするもの……六九
二八　過ぎにし方恋しきもの……七〇
二九　心ゆくもの……七〇
三〇　檳榔毛は……七二
三一　説教の講師は……七二
三二　菩提といふ寺に……七六
三三　小白川といふ所は……七六
三四　七月ばかり、
　　いみじう暑ければ……八三
三五　木の花は……八六
三六　池は……八八
三七　節は……八九
三八　花の木ならぬは……九二
三九　鳥は……九五
四〇　あてなるもの……九八
四一　虫は……九八
四二　七月ばかりに、
　　風いたう吹きて……一〇〇
四三　にげなきもの……一〇〇
四四　細殿に人あまたゐて……一〇二
四五　主殿司こそ……一〇二
四六　をのこは、また随身こそ……一〇三
四七　職の御曹司の西面の
　　立蔀のもとにて……一〇三
四八　馬は……一〇八
四九　牛は……一〇九
五〇　猫は……一〇九
五一　雑色随身は……一一〇
五二　小舎人童……一一〇
五三　牛飼は……一一〇
五四　殿上の名対面こそ……一一一
五五　若くよろしき男の……一一三
五六　若き人、ちごどもなどは……一一三
五七　ちごは……一一三

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

五八　よき家の中門あけて……二四
五九　滝は……二四
六〇　河は……二五
六一　暁に帰らむ人は……二六
六二　橋は……二七
六三　里は……二八
六四　草は……二八
六五　草の花は……二〇
六六　集は……二三
六七　歌の題は……二三
六八　おぼつかなきもの……二三
六九　たとしへなきもの……二三
七〇　しのびたる所にありては……二四
七一　懸想人にて来たるは……二五
七二　ありがたきもの……二六
七三　うちの局……二七
七四　職の御曹司におはしますころ、
　木立などの……二三〇
七五　あぢきなきもの……二三一
七六　心地よげなるもの……二三一
七七　御仏名のまたの日……二三三
七八　頭中将のすずろなるそら言を
　聞きて……二三四
七九　返る年の二月二十余日……二四〇
八〇　里にまかでたるに……二四五
八一　物のあはれ
　知らせ顔なるもの……二四九
八二　さてその左衛門の陣などに
　行きて後……二五〇
八三　職の御曹司におはしますころ、
　西の廂に……二五一
八四　めでたきもの……二六五
八五　なまめかしきもの……二六八
八六　宮の五節出ださせたまふに……二六九
八七　細太刀に平緒つけて、
　清げなるをのこ……二七三
八八　内は、五節のころこそ……二七三
八九　無名といふ琵琶……二七五

九〇　上の御局の御簾の前にて……一七七
九一　ねたきもの……一七八
九二　かたはらいたきもの……一八一
九三　あさましきもの……一八二
九四　くちをしきもの……一八三
九五　五月の御精進のほど……一八四
九六　職におはしますころ……一九四
九七　御方々、君達、上人など、
　御前に……一九四
九八　中納言まゐりたまひて……一九六
九九　雨のうちはへ降るころ……一九七
一〇〇　淑景舎、春宮へまゐりたまふ
　ほどの事など……一九九
一〇一　殿上より……二〇八
一〇二　二月つごもりごろに、
　風いたう吹きて……二〇九
一〇三　はるかなるもの……二一〇
一〇四　方弘は、いみじう……二一〇
一〇五　見苦しきもの……二一三
一〇六　言ひにくきもの……二一四
一〇七　関は……二一四
一〇八　森は……二一五
一〇九　原は……二一五
一一〇　卯月のつごもり方に……二一六
一一一　常よりことに聞ゆるもの……二一六
一一二　絵にかきおとりするもの……二一七
一一三　かきまさりするもの……二一七
一一四　冬は……二一七
一一五　あはれなるもの……二一八
一一六　正月に寺に籠りたるは……二二〇
一一七　いみじう心づきなきもの……二二七
一一八　わびしげに見ゆるもの……二二八
一一九　暑げなるもの……二二九
一二〇　はづかしきもの……二二九
一二一　むとくなるもの……二三一
一二二　修法は……二三二
一二三　はしたなきもの……二三三
一二四　関白殿、黒戸より

出でさせたまふとて……二三四
一二五 九月ばかり夜一夜
降り明かしつる雨の……二三六
一二六 七日の日の若菜を……二三七
一二七 二月、官の司に……二三八
一二八 などて官得はじめたる
六位の笏に……二四一
一二九 故殿の御ために、
月ごとの十日……二四二
一三〇 頭弁の、
職にまゐりたまひて……二四四
一三一 五月ばかり、
月もないと暗きに……二四七
一三二 円融院の御果ての年……二五〇
一三三 つれづれなるもの……二五三
一三四 つれづれなぐさむもの……二五四
一三五 とりどころなきもの……二五四
一三六 なほめでたきこと……二五五
一三七 殿などのおはしまさで後、
世の中に事出で来……二五九
一三八 正月十余日のほど、
空いと黒う……二六五
一三九 清げなるをのこの、双六を……二六七
一四〇 碁をやむごとなき人の
打つとて……二六八
一四一 おそろしげなるもの……二六八
一四二 清しと見ゆるもの……二六九
一四三 いやしげなるもの……二六九
一四四 胸つぶるるもの……二七〇
一四五 うつくしきもの……二七一
一四六 人ばへするもの……二七二
一四七 名おそろしきもの……二七三
一四八 見るにことなる事なきものの、
文字に書きてことごとしきもの……二七四
一四九 むつかしげなるもの……二七四
一五〇 えせものの所得るをり……二七五
一五一 苦しげなるもの……二七六

一五二　うらやましげなるもの……二七六
一五三　とくゆかしきもの……二七九
一五四　心もとなきもの……二八〇
一五五　故殿の御服のころ……二八二
一五六　弘徽殿とは……二九一
一五七　昔おぼえて不用なるもの……二九二
一五八　たのもしげなきもの……二九三
一五九　読経は……二九四
一六〇　近うて遠きもの……二九四
一六一　遠くて近きもの……二九四
一六二　井は……二九五
一六三　野は……二九五
一六四　上達部は……二九六
一六五　君達は……二九六
一六六　権守は……二九六
一六七　大夫は……二九七
一六八　法師は……二九七
一六九　女は……二九七
一七〇　六位の蔵人などは……二九七
一七一　女一人住む所は……二九九
一七二　宮仕へ人の里なども……二九九
一七三　ある所に、なにの君とかや
　言ひける人のもとに……三〇二
一七四　雪のいと高うはあらで……三〇三
一七五　村上の先帝の御時に……三〇四
一七六　みあれの宣旨の……三〇五
一七七　宮にはじめて
　まゐりたるころ……三〇六
一七八　したり顔なるもの……三一四
一七九　位こそなほめでたき
　ものはあれ……三一五
一八〇　かしこきものは……三一七
一八一　病は……三一八
一八二　好き好きしくて
　人かず見る人の……三一九
一八三　いみじう暑き昼中に……三二一
一八四　南ならずは……三二三
一八五　大路近なる所にて聞けば……三二三

一八六　ふと心おとりとか
するものは……三三四
一八七　宮仕へ人のもとに
来などする男の……三三五
一八八　風は……三三六
一八九　野分のまたの日こそ……三三七
一九〇　心にくきもの……三三九
一九一　島は……三三三
一九二　浜は……三三四
一九三　浦は……三三四
一九四　森は……三三四
一九五　寺は……三三五
一九六　経は……三三五
一九七　仏は……三三六
一九八　文は……三三六
一九九　物語は……三三六
二〇〇　陀羅尼は……三三七
二〇一　遊びは……三三七
二〇二　遊びわざは……三三七
二〇三　舞は……三三八
二〇四　弾く物は……三三八
二〇五　笛は……三三九
二〇六　見物は……三四〇
二〇七　五月ばかりなどに
山里にありく……三四六
二〇八　いみじう暑きころ……三四七
二〇九　五月四日の夕つ方……三四八
二一〇　賀茂へ詣る道に……三四八
二一一　八月つごもり、
太秦に詣づとて……三四九
二一二　九月二十日あまりのほど……三五〇
二一三　清水などにまゐりて、
坂もとのぼるほどに……三五〇
二一四　五月の菖蒲の、
秋冬過ぐるまで……三五一
二一五　よくたきしめたる薫物の……三五一
二一六　月のいと明かきに……三五一
二一七　大きにてよきもの……三五二

二一八　短くてありぬべきもの……三五二
二一九　人の家につきづきしもの……三五三
二二〇　物へ行く道に、
　清げなるをのこの……三五三
二二一　よろづの事よりも、
　わびしげなる車に……三五四
二二二　細殿にびんなき人なむ……三五六
二二三　三条の宮におはしますころ……三五八
二二四　御乳母の大輔の命婦、
　日向へくだるに……三五九
二二五　清水に籠りたりしに……三六〇
二二六　むまやは……三六〇
二二七　社は……三六一
二二八　一条の院をば
　今内裏とぞいふ……三六五
二二九　身をかへて天人などはかやうや
　あらむと見ゆるものは……三六七
二三〇　雪高う降りて、
　今もなほ降るに……三六八
二三一　細殿の遣戸を
　いととう押しあけたれば……三六九
二三二　岡は……三六九
二三三　降るものは……三七〇
二三四　日は……三七〇
二三五　月は……三七一
二三六　星は……三七一
二三七　雲は……三七一
二三八　さわがしきもの……三七二
二三九　ないがしろなるもの……三七二
二四〇　ことばなめげなるもの……三七三
二四一　さかしきもの……三七三
二四二　ただ過ぎに過ぐるもの……三七四
二四三　ことに人に知られぬもの……三七五
二四四　文ことばなめき人こそ……三七五
二四五　いみじうきたなきもの……三七七
二四六　せめておそろしきもの……三七七
二四七　たのもしきもの……三七八
二四八　いみじうしたてて

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

婿取りたるに……三七八
二四九　世の中になほ
いと心憂きものは……三八〇
二五〇　男こそ、
なほいとありがたく……三八一
二五一　よろづの事よりも
情あるこそ……三八二
二五二　人の上言ふを腹立つ人こそ……三八三
二五三　人の顔にとりわきてよしと
見ゆる所は……三八四
二五四　古代の人の指貫着たるこそ……三八四
二五五　十月十余日の月
いと明かきに……三八五
二五六　成信の中将こそ……三八六
二五七　大蔵卿ばかり
耳とき人はなし……三八六
二五八　うれしきもの……三八七
二五九　御前にて人々とも、また物仰せ
らるるついでなどにも……三九〇
二六〇　関白殿、二月二十一日に、
法興院の……三九四
二六一　たふときこと……四一七
二六二　歌は……四一八
二六三　指貫は……四一八
二六四　狩衣は……四一八
二六五　単衣は……四一九
二六六　下襲は……四一九
二六七　扇の骨は……四二〇
二六八　檜扇は……四二〇
二六九　神は……四二〇
二七〇　崎は……四二一
二七一　屋は……四二一
二七二　時奏するいみじうをかし……四二三
二七三　日のうらうらとある昼つ方……四二三
二七四　成信の中将は、入道兵部卿宮の
御子にて……四二三
二七五　常に文おこする人の……四二九
二七六　きらきらしきもの……四三一

二七七　神のいたう鳴るをりに……四三一
二七八　坤元録の御屏風こそ、
　をかしうおぼゆれ……四三二
二七九　節分違へなどして、
　夜深く帰る……四三三
二八〇　雪のいと高う降りたるを、
　例ならず御格子まゐりて……四三三
二八一　陰陽師のもとなる
　小童べこそ……四三四
二八二　三月ばかり物忌しにとて……四三四
二八三　十二月二十四日、
　宮の御仏名の……四三六
二八四　宮仕へする人々の
　出であつまりて……四三八
二八五　見ならひするもの……四三九
二八六　うちとくまじきもの……四三九
二八七　右衛門尉なりける者の、
　えせなる男親を持たりて……四四一
二八八　小原の殿の御母上とこそは……四四三
二八九　また、業平の中将のもとに……四四四
二九〇　をかしと思ふ歌を……四四四
二九一　よろしき男を、
　下衆女などのほめて……四四四
二九二　左右の衛門尉を
　判官といふ名つけて……四四五
二九三　大納言殿まゐりたまひて……四四六
二九四　僧都の御乳母のままなど……四四八
二九五　男は、女親亡くなりて
　男親の一人ある……四五〇
二九六　ある女房の、遠江の子なる人を
　語らひてあるが……四五一
二九七　便なき所にて、
　人に物を言ひける……四五二
二九八　まことにや、やがてはくだると
　言ひたる人に……四五二

一本　きよしと見ゆるものの次に

一　夜まさりするもの……四五三
二　ひかげにおとるもの……四五三
三　聞きにくきもの……四五四
四　文字に書きてあるやうあらめど
　心得ぬもの……四五四
五　下の心かまへてわろくて
　清げに見ゆるもの……四五四
六　女の表着は……四五五
七　唐衣は……四五五
八　裳は……四五五
九　汗衫は……四五六
一〇　織物は……四五六
一一　綾の紋は……四五六
一二　薄様、色紙は……四五六
一三　硯の箱は……四五七
一四　筆は……四五七
一五　墨は……四五七
一六　貝は……四五八
一七　櫛の箱は……四五八
一八　鏡は……四五八
一九　蒔絵は……四五八
二〇　火桶は……四五九
二一　畳は……四五九
二二　檳榔毛は……四五九
二三　松の木立高き所の……四六〇
二四　宮仕へ所は……四六三
二五　荒れたる家の蓬深く……四六三
二六　池ある所の……四六四
二七　初瀬に詣でて、
　局にゐたりしに……四六五
二八　女房のまゐりまかでには……四六六
この草子、目に見え心に思ふ事を……四六七

校訂付記……四六九
解　説……四七五
付　録
枕草子年表……五二〇
枕草子関係系図……五三二
大内裏・内裏図……五三八
京都歴史地図……五四〇
平安京条坊図……五四二

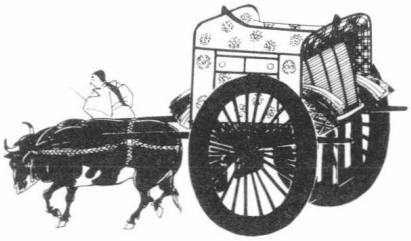
図　版　須貝　稔
地図制作　表現研究所
編　集　堀井　寧
装　幀　菊地信義

枕草子を読むたのしさ

平安時代は、日本の文学史の上で女流文学の時代といわれる。その中で最も鮮烈なきらめきを放つ二作品が、『枕草子』と『源氏物語』である。作者は清少納言と紫式部という二つの際立った存在であり、この二人は、十世紀の終りから十一世紀の初めというほぼ同時代を、一条天皇の二人の妃、定子と彰子、にそれぞれ仕える女房として生きた。作品としての『枕草子』と『源氏物語』の印象はかなり異なるのだが、この二人の持ち味に少し立ち入ってみても、人間の二原型とも考えられるほどの違いがあろう。大まかに言えば『枕草子』の、現象や時間をいきいきと自在に切り裂いて行く鋭い感性をとるか。『源氏物語』という、虚構世界の中で深く厳しい人間への洞察を示した、高い精神の達成度を評価するか。ここには、客観的な把握とは別に、好きか、否か、という読み手の感性が関わってきそうである。

『枕草子』は、初めての出会いの時に、心の中にまっすぐに入り込んでくる古典の一つであろう。それが多感な年ごろであるとすれば、現代の感覚に近い新鮮で明るいきびきびした精神の躍動や、日本の言葉のおもしろさや美しさを如実に伝えるにちがいない。と同時に、作品自体が挑発的な揺れを内在させていて、なにやら得体の知れぬ反発を呼び起こす、ということがあるかもしれない。『枕草子』に関しては、あらゆる事が、不思議に不確定なのである。

いわゆる文学作品とよばれるものは、決して安全無害なものではなかろう。心を動かす力を持つということ



は、危ういほどの領域に人を強く誘うということに他ならない。『枕草子』もその意味の危なさを当然持っているが、それにしてはいかにも晴朗の気に満ち、屈託がなくて明るい。よいと思うものをよいと言って感激し、おもしろいと思ったものをおもしろいと言って笑う。この作品は読み手に対し、ほとんど何も説明しない。そこで、いささか不安になって、更に一歩進もうとするのだが、実は進もうにもその手だてがほとんどないことに改めて気づき、また困惑するのである。おそらくこの作品は、その「進もう」という気持を喚起する、まさにその一瞬に動的な、文字通り「心を動かす」魅力があるのであって、散文ではあるものの、説明抜きで直接に歌い上げる、自在な詩的世界や、思いがけない深淵を抱え込んでいるのだろう。『枕草子』の全体像を思い描こうとする時初めて、この作品は、言うべきこと、言うべきではないことを識別した、選択と決断、という案外大きな秤の上に成り立っていて、そこに意外なほどの厳しさと心意気ととまどいとを抱え込んでいることにも気がつく。身近な現実に立ちながら、現実そのままではなく、ある世界を結果的に構築している作品なのである。その基準は、一口に言えば、本物の美しさ、とでも言えようか。

『枕草子』は、注釈や現代語訳を気にせずに、本文を手にして、どこからでも、気軽に、自分の目で読むのが一番たのしい。ところで、現在出版されている『枕草子』（活字になったものを以下、「書物」という）を読む場合の、ある種の「不便さ」をいくつか。

まずいろいろな本文があるということについて。清少納言が書いたままのものは残念ながら現存していない。最も古いものでも鎌倉中期の書写である。そもそも何度かに分けて書かれたものであるらしいし、書き直しや増減もあったと考えられる。さらに、長い間にわたって手から手へと書き写されてきたために、さまざまな伝本が現在存在している。伝本によって、章段の有無や長短があったり、配列が前後していたり、文章自体が異

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com